

ふゆがすみ／霞と霧（もや）が区別しにくいですが、霧の薄いのが霞であるのに対し、霞の方は、薄い霧も含めて、風の無い冬の朝や夕方に遠景がぼやけて見える現象です。草の上にたどり着いて霜になる手前で朝となってしまった、そんな霜になり損なった水蒸気が冬霞の正体ようです。

らしく

自分らしく、
粹なくらし



特集

広島を魅せる、もうひと組のプロデューサー

アーティストを、美術館を盛り上げるサポーターシステム▼ゲンビ・サポートボランティア
地域に根ざした神楽文化を世代を超えて引き継ぐ▼石内神楽団

オペラの普及と音楽人の人材育成にも貢献▼ひろしまオペラ・音楽推進委員会

H^m助成支援団体のご紹介／人材バンク名人達人宝人／ようこそー公民館へー佐伯区内公民館／
らしくレポート・水辺のコンサートギターデュオ「David&Naoko」／らしくコラム・マンガ文化と広島／情報の森／プラザ通信



広島を魅せる、もうひと組のプロデューサー

芸術の秋の到来。「国際平和文化都市広島」の文化の魅力を生み出すには、芸術家を側面的にサポートする数多くのボランティアの力が欠かせません。今回は、広島市現代美術館を拠点にして出展するアーティスト、そして伝統文化を裏方で支え応援する「もうひと組のプロデューサー」の活動を紹介します。



▲ サポートボランティアの皆さん

現代アートを身近に触れて、 アーティストを、美術館を盛り上げる サポートボランティア

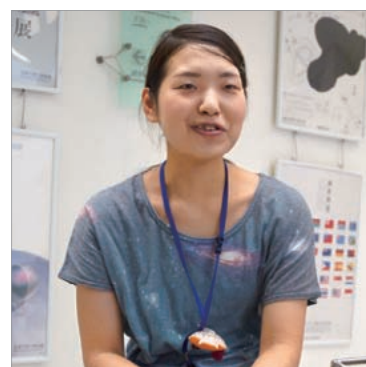
ゲンビ・サポートボランティア
<http://www.hiroshima-moca.jp/>

アーティストを より身近に感じて

1989年5月、広島市南区比治山の丘陵に開館した広島市現代美術館が、展覧会を行う中で、アーティストに設営・活動補助が必要な時やワークショップを開催する時などにサポートする目的でスタートしたのが、「ゲンビ・サポートボランティア」です。

開館して19年目の2008年4月に始まったこのボランティアは、そもそものは同年2月に開かれた『シエラ・サイバール』と題した展覧会から始まりました。出展をしたアーティストが、開催期間中に、一般の人たちの助けを借りて作品を作ったことがきっかけになったそうです。

「この展覧会でも必要になる訳ではありませんが、現代アートに興味を持っている人はたくさんいます。どちらかと言えば、アーティストは近寄り難い存在。しかし、ボランティアとして関わることで、遠い距離感も近くに感じてもらえる



▲学芸員：山下 樹理さん

のではないだろうか。そう考えて、このサポートボランティアを立ち上げました」と広島市現代美術館の学芸員で教育普及担当の山下樹理さんは語ります。

現代美術を肌で感じたい

「僕は、別のアートボランティア活動に参加した経緯もあって、2008年に開かれた子ども向けのワークショップに別口でボランティアとして参加したんです。そのこともあってその後正式にゲンビ・サポートボランティアに登録しました。普段なかなか見ることができない美術館の裏側を見ることができ

りましたが、初めて参加した際に、そのイメージは間違っていたことが分かりました。ボランティアのメンバーみんなで、アーティストの依頼内容に応じ、世代を超えて一致団結してサポートしたことで、楽しいイメージに変わりました」と言います。

展覧会の内容によって、サポートボランティアが必要となる場面が何度もあったり、逆に無かったり：

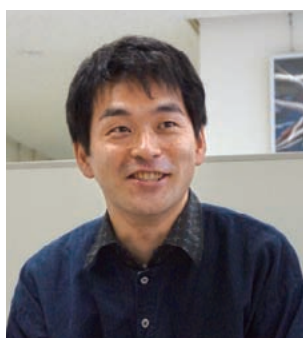
アーティストと共に楽しみ、 美術館を盛り上げる

2012年で5年目を迎えたゲンビ・サポートボランティアは、アーティストからも高評価をいただいているそうです。

学芸員の山下さんは、「展覧会のために国内外から訪れる数々のアーティストも、現代アートが好きで地元の方々と一緒に活動できる雰囲気を楽しんでいます。アーティストとボランティアの近からず遠から

ずの距離感を新鮮に感じてもらえているようです。全国の美術館の中でも珍しいこのサポートボランティアに参加してくれるメンバーが、楽しんで関わってくれることを嬉しく思います。特別展は、年4回の開催で、ボランティアをお願いするチャンスも限られますが、これからは形を色々と考えてもっと機会を増やすことができたいと思います」と今後の活動への期待を語ってくれました。

アーティストだけに限らず、「ゲンビ・サポートボランティア」が、広島市の現代アートを盛り上げる存在になれば、というのがメンバーの共通した目標です。



▲堀 昌明さん

き、アーティストの仕事に関われる。減多にない経験を積めることが参加のきっかけです」と語るの、ボランティア設立当初から参加している堀昌明さん。

で月に2〜3回活動を行っていますが、許されるならもっと数多く関わりたいですね」と言います。このゲンビ・サポートボランティアは登録制で、現在は大学生、社会人、主婦など約130名が登録して、それぞれが活動スケジュールの都合に応じて参加。

今年初めてボランティアに登録した学生の兵頭美紀さんも「応募したときは、堅苦しいイメージがあ



▲戸村 友香梨さん



▲兵頭 美紀さん

らしく contents

Vol.34
冬霞号
2012.11

特集

広島を魅せる、 もうひと組のプロデューサー

…… ゲンビ・サポートボランティア
…… 石内神楽団
…… ひろしまオペラ・
音楽推進委員会

支援団体のご紹介

…… ファッションセラピーの会ヒロシマ
…… 読み聞かせボランティア
「あさがの会」
…… 基町地区社会福祉協議会

人材バンク 名人 達人 宝人

…… ピース広島メンタルヘルス協会
米村 哲次さん
…… 帯刀 昭二さん

ようこそ！公民館へ

…… 佐伯区内公民館

らしくレポート

…… 「水辺のコンサート」
ギターデュオ「Javid & Naoko」

らしくコラム

…… マンガ文化と広島
比治山大学短期大学部 美術科
マンガ・キャラクターコース
久保直子助教

情報の森

プラザ通信



表紙写真／学芸員の山下さんと
サポートボランティアの皆さん

オペラを、もっと身近に、より親しみやすく。 そして、普及と音楽人の人材育成にも貢献

ひろしまオペラ・音楽推進委員会

<http://www.cf.city.hiroshima.jp/naka-cs/opera/>



高宮敏浩事務局長

平成4年に「高度な総合舞台芸術のオペラを通じて、地域の芸術家、団体の育成・活性化やオペラの普及・振興を図って『オペラのまち広島』を都市の顔として定着させる」ことを目的に、現在の「ひろしまオペラ・音楽推進委員会」の前身団体となる「ひろしまオペラ推進委員会」が文化庁の新文化拠点推進事業の地域指定を受けて設立されました。実は広島とオペラの歴史は意外にも古く、終戦直後には、出征軍人等の送迎施設である宇品凱旋館で『蝶々夫人』が上演され、その後も活発に活動されていたそうです。また、地方都市では珍しく多くのオペラ団体が存在し、中・四国唯一のプロオーケストラ「広島交響楽団」もあり、平成3年に本格的なオペラ公

音楽文化の向上を目指して

演に適した劇場アステールプラザが開館しました。そして、音楽専門の高校や大学もあつて人材も育成されている。そう言ったあらゆる音楽環境に最適な条件が整っていることから、オペラ事業への取組みが始まりました。

環境が人を育て、文化を創造する

当委員会が主催する「ひろしまオペラ・ネットサンス」事業は5年をひとりの区切りに活動しています。スタート時は、ひろしまオペラ・ネット独自の創作オペラの制作・上演以外にも各オペラ団体の公演や「ガラ・コンサート」を開催する他、トークイベントなども展開。まずは幅広い人達にオペラを身近に感じてもらう活動を始めていきました。

「平成14年からオペラ事業に携わることになり、先人たちが培ってきたオペラという文化財産を、より良い形に創造・発展させていくのが課題でした。幸いにも、事業に関わってくれる人たちがみんな楽しみながら生懸命に取り組んだ結果、人という財産が培われ、広島文化の底上げに繋がっています。これも、広島にはオペラ団体や広響、音楽専門の高校や大学など音楽環境が整っていたからこそだと思っています」と「ひろしまオペラ・音楽推進委員会」の事務局次長の高宮敏浩さんは語ります。



▲平成23年度「ラ・ボエーム」公演の様子

イタリア・ドイツの定番オペラの上演を事業の中心に据えての本格的なオペラ制作や、人材育成にも積極的に取り組む事業展開は、全国的にも注目を集め、平成19年には現代音楽やクラシック音楽まで事業を拡充して現在の「ひろしまオペラ・音楽推進委員会」へ名称を改め、活動の幅を拡げていきました。平成18年には、日本オペラの殿堂といわれる東京・新国立劇場から招聘されて公演を行った他、平成21



▲平成21年度「椿姫」公演の様子

チームワークを固めて、音楽文化の発展に挑戦！

「オペラの魅力は、人と人との共同作業の醍醐味です。指揮、演出、キャスト、オーケストラ、音楽・舞台スタッフ…ひとつの作品に関わる人みんなが力を合わせないと、良い作品は創れません。幸いにも、今のひろしまオペラに関わっている人たちはみんないいチームワークで動いています。今後は、もっと新しい作品にもチャレンジし、広島のアステールプラザという劇場から発信していく。それが広島文化発展に繋がっていくと考えています」。

オペラという音楽ジャンルを通して、広島の人材育成を図り、成長するためのチャレンジ精神を忘れない組織の今後の活動が楽しみです。

先祖代々、地域に根ざした神楽文化を祖父から父へ。 父から子へ…世代を超えて引き継ぐ

石内神楽団

<http://sky.geocities.jp/ishiutikagura/>



▲10月13日の石内奉納神楽の様子

神楽は、古事記・日本書記の中に出てくる「天岩戸伝説」がその起源とされ、日本のさまざまな地域で、それぞれ特徴ある神事芸能として発展してきました。広島は、日本の中でも神楽が盛んな地域とされており、現在は県内で250を超える神楽団が、主に芸北神楽、安芸十二神祇神楽、芸与諸島の神楽、比婆荒神神楽、備後神楽の5つの種類に分かれて活躍中です。その中のひとつ石内神楽団は広島市佐伯区五日市町石内地区で活躍中の団体です。伊勢神宮で古くから行われてきた伊勢神楽十二神祇が今から二百数十年前の石内地区に伝授されて以来、代々書物ではなく、口伝で受け継がれ、長い人では親子6〜7世代に渡って継承してきたそうです。そして二期、後継者不足からその歴史が途絶えます

200年近く口伝で脈々と受け継がれてきた神事



▲毎週2回練習を重ねる子ども達

が、今から8年前の2004年に神楽団としての活動を再開しました。

きっかけは神楽を愛する言葉

石内神楽団は、代々口伝えされてきた12の舞を奉納することから十二神祇と呼ばれる神楽を継承しています。

「後継者不足で神楽が途絶えてしばらくたつたとき、当時の石内小学校の校長先生と神楽の話で盛り上がり、校長先生から『団員募集を小学生に呼び掛けるので、ぜひ神楽を復活して欲しい』という要望を受けたのです」と石内神楽団の団長有井健司さんは語ります。

活動再開後には、小学生から高校生まで11名の子どもたちが中心となつて神楽を演じています。活動を再開する前は、石内地区の限られた地区の住民しか団員として参加することができませんでした。しかし、神楽団の再開にあたり、その垣根を取り外し、石内小学校区の子どもで意欲があれば参加可能としたそうです。そうすることで、神

楽に興味を持った子どもたちが新たな団員として活躍することができるようになりました。

「僕も、小学2年生の頃、たまたま親戚が神楽の舞手として舞う姿を見て『格好いい。自分もやってみよう』と思ったのが、神楽を始めるきっかけです。しかし、しばらくして神楽団が時活動を停止し、高校卒業後に再開したときは嬉しかったですね。すぐに参加しました」。現在は、社会人として働きながら舞手として参加している中島光裕さんは語ります。「子どもの頃、僕が憧れたのが長刀舞です。長刀は重くて、子どもの自分には持つことができませんでした。が、師匠に何



練習を見守る有井健司団長(左)と中島光裕さん(右)

未来に向けて

有井団長が団を引き継いだおよそ8年前と、今の子どもたちとの神楽に対する意識は違っているようですが、それは時代の流れで仕方ないこと。今は、その時代に合わせた練習方法で取り組んでいくしかないと考えているそうです。日本古来の伝統文化の神楽を通して、石内地区では親と子が世代を越えたコミュニケーションを重ねて、地域を活性化している息吹を感じました。

ていると言います。